

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04309

研究課題名(和文)子育て期の女性における自己と他者の調整

研究課題名(英文)Negotiation between selves and others in motherhood

研究代表者

平井 美佳(Hirai, Mika)

横浜市立大学・国際教養学部(教養学系)・准教授

研究者番号：60432043

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、子育て期の女性における「自己と他者の調整」について明らかにすることを目的とした。38～49歳の子育て中の女性31名からの協力を得て、面接法、日誌法、質問紙法を組み合わせ、半年～1年に渡る短期縦断的な調査を行った。このうち日誌法では毎日の自己と他者の調整を1週間、数ヶ月を空けて2回に渡り記録してもらった。その結果、日常の調整は子どもとのものが3割と最も多いものの、ついで夫、仕事、その他の人、家族間などの調整があり、その頻度はライフスタイルや生活満足度、価値観と関連していた。ライフキャリアの経路は個人によって多様であることが示され、夫との調整が生活の質を左右することも示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的な特色は、第1に方法論的な特色が挙げられる。具体的には、これまでの先行研究が使用してきたような仮説的場面ではなく、日常のリアルな自己と他者の調整に接近したこと、調査手法として多様な方法を組み合わせたこと、そして、短期ではあるものの縦断的に検討することにより、振り返ることの変化に迫ろうとする点が挙げられる。第2に、家庭と仕事との両立のみを焦点化するのではなく、働かないことを選択する女性たちの声をも収集したことである。就労の有無や正規/非正規に関わらず、現代の母親に共通する問題にも焦点を当てた。そして、第3に、ワークとライフの統合とは何かを考察するための材料を得ようとする点である。

研究成果の概要(英文):The aim of this study was to examine "negotiation between self and others" in middle aged women during child rearing. Thirty-one females (age 38 to 49) were participated in a short-term longitudinal survey for half a year. They were asked to answer to questionnaires, three times interviews, and one week diary method twice several month apart to record their daily negotiations of selves and others. As a result, there were daily negotiations with their children, husbands, at workplace, other people, and between families, etc. These frequencies were related to their lifestyles, life-satisfaction, and their family values. It was shown that the life career pathways were diverse for each individual, and it was also suggested that negotiations with the husbands influences the quality of life.

研究分野：発達心理学，臨床心理学

キーワード：自己と他者の調整 女性 子育て 仕事と家庭の両立 ライフキャリア アイデンティティ 中年期

1. 研究開始当初の背景

個としての独立性と重要な他者との関係性はともに、生涯にわたって人間にとって重要であり、両者は互いに密接に関連し、弁証法的、また、相互構成的に影響を与え合うと考えられると考えられる。

平井(2000, 2006, 2008, 2012, 2017)は、自己と他者の両者の要求が対立した場合に人々がどのような調整を行うのかについて、「自己と他者の調整」と呼び、実証的に検討してきた。これらの先行研究では、自己と他者の要求が葛藤や対立する仮説的ジレンマ場面を用い、状況に応じて人々がどのように自己と他者の調整を行うのかについて検討してきた。しかし、日常において実際に起こる調整について扱っていないこと、多重役割を担う中年期の人々における調整を検討していないこと、そして、独立性と関係性の両者がいかに個人の中で関わりあうのかといった問題について十分に検討されていなかった。そこで本研究では、子育て期の女性を対象として、多様な他者との実際の自己と他者の調整と、女性個々人の独立性と関係性のバランス、すなわち、女性の個としての自己やアイデンティティの発達と多様な人々に支えられながら子をケアする母親としての発達について検討する。

(1) 「家庭」と「仕事」のバランス

子育て期の女性における自己と他者の調整とその発達を捉えるには、「家庭」と「仕事」のバランス、また、それに影響を与える要因について検討していく必要がある。社会政策的な関心からも、仕事と生活の調和を問題とする「ワークライフバランス(WLB)」が叫ばれるようになって久しい。しかし、やわが国は依然として女性(そして、男性も)が働きながら子育てをすることが困難な社会であり、特に「家庭」に関する負担は依然として女性側に重くのし掛かっている。「女性活躍推進法」や「働き方改革関連法案」も施行されたものの改善への道のりは遠い。

心理学ではワーク・ファミリー・コンフリクト(WFC)(e.g., Greenhaus & Beutell, 1985)に関する研究があるが、心理尺度を利用する量的な研究(e.g., Carlson, Kacmar, & Williams, 2000; 渡井・錦戸・村嶋, 2006)が多く、面接調査も併用して検討した研究(加藤, 2010)やジレンマ場面を用いた面接調査(小堀, 2010)もあるものの、基本的には葛藤を調整する女性の主体性の問題や、その発達の变化は十分に扱われていないように見受けられる。

子育て中の女性は、働き方にも応じて自己と他者の調整を行いながら、親および職業人として、統合的に発達していくと考えられる。平木(2015)が「ライフとワークをつなぐ」と述べたように、「家庭」か「仕事」かという二項対立的に捉えるのではなく、それらの葛藤を通して女性がどのように折り合いをつけ、自分を大切にしながら周りの人を大切にするか、また、時に葛藤するいくつかの側面をどのように自分の人生という物語の中にどのように統合していくのかという視点が極めて重要であると考えられる。

(3) 日常における調整と主体として発達する個人

現実の生活における日々の調整とその調整を行う主体とを考慮していくにあたり、アイデンティティ(Erikson, 1968; Lichtwarck-Aschoff, van Geert, Bosma, & Kunnen, 2008; Lichtwarck-Aschoff, Kunne, & van Geert, 2009)、意味づけ(Park, 2010; 堀田, 2013, 2016)、そして、リフレクション(神戸, 2017; Lips-Wiersma & Morris, 2009)といった概念を参照する。これらの理論は総じて、ミクロレベルの日々のやり取りや必要に応じて選択する行動があるが、人々は時にそれを振り返り、そこに意味を見出し、自分らしさとは何かを模索すると考えられる。本研究においても、これらの視点から、日々の具体的な調整と自己やアイデンティティとの関連について検討する。すなわち、女性自身のこれまでについての振り返りと日々の自己と他者の調整との関連、また、日々の自己と他者の調整を振り返ってもらうことで生じる変化についても注目する。

2. 研究の目的

以上のことから、本研究では日誌法による日常の自己と他者の調整に関する出来事の報告と面接調査による語りを組み合わせて、子育て中の女性の「自己と他者の調整」について検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 調査協力者

東京とその近郊に暮らす子育て中の38~49歳の女性31名(平均年齢43.32歳, SD = 2.54)。筆者の知人またはその紹介により協力者を募集し、現在就労中の女性と専業主婦の女性の両方を募集した。要因をある程度は統制するために、募集時の参加条件を設け、首都圏とその近郊に暮らす30代後半から40代の女性で、現在4歳以上中学生以下の子ども1人または2人を子育て中であること、最終学歴が短大または4年制大学以上であり、卒業後少なくとも1年以上の就労経験(正規・非正規どちらでも可)があること、配偶者がおり、生活に大きく困ることがない家庭の経済および生活状況であることとした。よって、社会階層が比較的高く、働かなくとも生活はできる女性たちであるといえる。

学歴は短大卒5名、4年制大学卒19名、大学院卒7名で、現在の職業はパート・アルバイト6名、会社員2名、自由業1名、心理士2名、専業主婦9名、大学教員4名、大学職員7名。配偶者(夫)については、31~58歳の平均45.787歳(SD = 5.17)、職業はほとんどが会社員(24名, 74.2%)で、その他は会社役員、会計士、自営業、技師、大学教員、大学職員であった。子どもが1人の者が17名(56.1%)と2人の者が13名(41.9%)で、第1子は男子16名、女子15名、年齢4~15歳の平均9.55歳(SD = 3.19)で、第2子は男子7名、女子7名、年齢4~12歳の平均8.50歳(SD = 2.41)であった。家庭の主観的経済状況は「経済的にかなりゆとりがある」

が1名、「経済的にまあゆとりがある」が19名、「経済的にゆとりはないが、困ってはいない」が11名。夫婦間の家事育児分担は、「ほぼ夫がやっている」が1名(3.2%)、「やや夫の方がやっている」が2名(6.5%)、「同じくらいやっている」が2名(6.5%)、「やや私の方がやっている」が7名(22.6%)、「ほぼ私がやっている」が18名(58.1%)、「すべて私がやっている」が1名(3.2)であった。結婚の年齢は25-39歳、平均29.91歳($SD = 3.17$)、第1子の出産年齢は28-40歳、平均33.19($SD = 2.93$)、第2子の出産年齢は30-39歳、平均34.37($SD = 2.72$)で、ライフスタイルによる差異はなかった。

(2) 調査の手続き

調査の流れをまとめると、以下ようになる。事前質問紙調査 → 1回目の面接 → 1回目のWeb調査 → 2回目の面接 → 2回目のWeb調査 → 3回目の面接 → 追加調査

(3) 調査内容

事前の質問紙調査： 生年月日、最終学歴、現在の職業、夫の年齢、夫の職業、子どもの生年月日、主観的経済状況(1項目)、同居の家族の有無、子ども(2人いる場合はそれぞれ)の内的および外的問題行動とQOL(平井ら(2015)で使用した計10項目)、社会的サポートネットワークの成員、夫婦関係満足度(1項目)、結婚満足度(諸井, 1996)、夫婦ペアレンティング調整尺度(加藤・黒澤・神谷, 2014)、家庭(育児家事)分担(「すべて夫がやっている」から「すべて私がやっている」の1項目7段階)、家族の表出性(Cassidyら, 1992; 本島, 2013)、抑うつと不安(HAD, 八田ら, 1998)、生活満足度(1項目)、「母性愛」信奉尺度(江上, 2017)、家族主義尺度(平井ら, 準備中)、その他、子どもや夫との関係で困っていることの詳細を自由記述を求めた。

1回目の面接調査： 現在までのライフキャリア(過去)、現在の生活について(現在)、これからの生活のイメージ、子育てについてどのように考えているかなどについてたずねた。

2回目の面接調査： 前回の面接の感想、前回からの変化について確認した後、Webによる7日分の日記について、調整の相手、結果、頻度、理想、その影響を尋ね、さらに7日間全体の感想を求めた。また、それらを振り返ってみての感想や「自分らしい」と思うところ、子どもが小さかった時との違いなどについても聴取した。

3回目の面接調査： (2回目と同様にWeb調査について聞いた後で)調査全体の振り返りと、再度、子育てについての考えや、将来の社会に望むことなどについて回答を求めた。

Webによる日誌法の調査(全2回)： 約束した7日間に毎日(2週分)Web上で、「今日一日の中で、あなた自身と他者(家族を含む)との間で、要求や希望の対立や葛藤が生じ、「調整」が必要になったこと」について記してもらった。他に、その日の出来事について困る程度、解決したか、そして、その日の満足度についても回答を求めた。

追加のWeb調査： 調査を振り返っての感想(自由記述)、多次元アイデンティティ発達尺度(DIDS; 中間・杉村・畑野・溝上・都築, 2014)、心理的自立尺度(平井, 2016)、日本の家族主義尺度(平井ら, 準備中)、意味づけにおける同化・調節尺度(堀田・杉江, 2013)の回答を求めた。

(4) 倫理的配慮

本研究は実施前に横浜市立大学にて倫理審査の承認を得ている(研究課題名:「子育て期の女性における自己と他者の調整」, 承認番号 八 2017-5)。

4. 研究成果

(1) 日誌法の内容分析

各調査協力者について14日分の日記の内容(31名×7日×2回=計434のエピソード)を分類した。まず、「困る」程度については、「困らない」が41(9.2%)、「あまり困らない」が62(13.8%)、「どちらともいえない」が54(12.1%)、「やや困る」が185(41.3%)、「困る」が92(20.5%)で、平均3.51($SD=1.24$)であった。「調整する必要がなかった」として、エピソードの記載がなかったものは22であった。残りのエピソードの記載された内容のうち、その日のうちに解決したものが222(52.1%)、その葛藤自体は解決したが同様の問題が続くとされたのが61(14.3%)、後日解決したとされたのが31(7.3%)、解決しないものが98(23.0%)であった。また、類似の出来事が起こる頻度は、初めて~年数回が119(27.9%)、月1回~数回が113(26.5%)、週1回~毎日が180(42.3%)であった。

各エピソードの内容についてさまざまな基準で繰り返し分析を試した結果、Table 1のとおり内容に分類するのが妥当であると判断された。最初に分類した21のコードは、さらに「種類」としてカテゴリー化を行った。この時、相手が夫や子どもである場合はまとめたが、家族全体の予定や複数の家族メンバー間の調整について述べられている場合には「家族間」として分類した。Table 1にみるように、カテゴリー化した種類別にみると、子どもとの葛藤が3割を超え、次いで、仕事23.6%、夫15.4%、その他の他者18.5%の順に生起率が高く、家族間の調整も7.8%であった。また、「葛藤なし」とされたもの、および、前日の内容が続いている場合は「なし、繰り返し」とし、8.1%であった。

各エピソードを単位とした分析では、葛藤の種類によって困る程度($F(5,433)=13.55, p<.01$)やその日の満足度($F(5,433)=6.72, p<.01$)は異なり、子どもとの葛藤ではなく、夫との葛藤や仕事での葛藤において困難感が高く、その日の満足度が低かった。また、困った出来事であるほどその日のうちには解決しておらず($r=-.42$)、その日の満足度も低かった($r=-.47$)。

なお、以上の日記全体の分析では、「困らない」「あまり困らない」「どちらともいえない」と

回答されたものも含まれる。そこで、以下では、日記の各エピソードについて「困った」「やや困った」と回答されたエピソードのみ(全体の63.4%)に絞って検討する。全体のエピソードとの割合を比較すると、夫との葛藤がやや増え、子どもとの葛藤がわずかに減る程度で、夫が2割、子どもが3割、仕事とその他の人との葛藤が約2割前後であり、やはり子どもとの調整がもっとも多かった(Table 1の右列)。

14日間中の出現数を個人の変数とした。平均値は夫との調整が1.77($SD = 1.91$)、子どもとの調整が2.68($SD = 1.80$)、家族間の調整が0.71($SD = 1.01$)、仕事関連の調整が2.19($SD = 2.59$)、その他の人との調整が1.68($SD = 1.62$)、葛藤なし(困る程度が「どちらともいえない」以下)が4.58($SD = 2.66$)であった。これらの変数間の相関を検討すると、仕事と子ども($r = -.36$)、および、家族間($r = -.44$)との間に有意な負の相関が認められ、また、葛藤がない日数と夫との葛藤($r = -.48$)と仕事の葛藤($r = -.46$)との間に負の相関が認められた。さらに、夫との葛藤が「困る」程度の平均と有意な正の相関($r = .52$)、また、満足度の平均と有意な負の相関($r = -.41$)を示した。よって、仕事との葛藤が多いと子どもや家族間の調整の頻度が少ないこと、また、葛藤がないことは、翻って、夫および仕事との葛藤が少ないということ、さらに、夫との葛藤の頻度の高さが日々の困難感や生活満足感に関わることがわかった。

表3 日記内容の分類(各コードの頻度とそれが全体に占める割合)

Code	項目	度数 N= 434	%	種類	%	葛藤*
1	夫との意見の対立や葛藤	32	7.4%			
2	役割分担の調整	28	6.5%	夫	15.4%	19.6%
3	夫のケア	7	1.6%			
4	子の生活時間	31	7.1%			
5	子のしつけ(態度やマナー)	21	4.8%			
6	子の勉強, 習い事	29	6.7%	子ども	32.7%	30.2%
7	子のケア(病気, 送迎, 身体の心配)	22	5.1%			
8	子の要求との調整		9.0%			
9	家族間(3人以上, 家族の予定)	23	5.3%			
10	親子間(配偶者と子)	5	1.2%	家族間	7.8%	8.0%
11	きょうだい間	6	1.4%			
12	仕事の同僚上司との調整	36	8.3%			
13	仕事相手との調整	15	3.5%	仕事	18.7%	23.6%
14	仕事家庭間	30	6.9%			
15	自分や夫の親, きょうだい, 親戚	16	3.7%			
16	親仲間(PTA, ママ友)	27	6.2%			
17	自分の友人	8	1.8%	その他	17.3%	18.5%
18	子どもの先生, 友人	8	1.8%	の他者		
19	近所地域や教会の人, ボランティアの人	10	2.3%			
20	他人	6	1.4%			
21	なし, 繰り返し	35	8.1%	なし	8.1%	0.0%

* 葛藤がある(「困った」「まあ困った」)ものみに絞った場合の割合

(2) ライフコースの分析

面接で聴取した各個人のライフコースを分類した。まず、産休育休を除いて基本的に仕事を継続してきた人を「仕事継続群」(11名, 35.5%)、産休育休を除いて一度はしばらく育児に集中した後に仕事を再開した人で、調査開始時点で概ねフルタイムに近い状況で働いている人を「再開・仕事中心群」(5名, 16.1%)、同じく産休育休を除いて一度はしばらく育児に集中した後に仕事を再開した人のうち、週3日以下や短時間の勤務で子育て中心で生活している人を「再開・子育て中心群」(6名, 19.4%)、さらに、調査開始時点で仕事をしていない人(ボランティア活動は仕事に含めない)を「専業主婦群」(9名, 29.0%)とした。さらに、これら4つの群を2群ずつ合わせてはじめての2つを合わせて「両立群」(16名, 51.6%)、後ろの2つを合わせて「子育て中心群」(15名, 48.4%)とした。他にも、子どもの数が1人か2人か(人数は方法で既述)、10歳以上の子どもがいる(16名, 51.6%)かいないかでも検討を行った。

過去のキャリア選択や現在の状況についても分類を行った。まず、大学卒業の時点で進路について自ら積極的に考えて選択した積極的進路選択群は31名中18名(58.1%)、また、妊娠・出産時より仕事との両立を志向していた両立志向群は17名(54.8%)であった。これらのグループ変数を組み合わせて、次の4群に分類した。すなわち、成人形成期にアイデンティティをある程度達成してその仕事を現在まで継続している初志貫徹両立群6名(19.4%)、卒業後は特に積極的に選択したのではない職業で働くなどしており、後から自分らしい働き方を見つけそれを継続している中途確立群8名(25.8%)、卒業時にやりたいことを見つけていたがその後結婚出産を経て両立しないことを自ら積極的に選択した専業主婦群9名(29.0%)、それ以外の思い通りに仕事ができている人、および、特に意識的に選択することなく進んできている人を非希望

群 8 名 (25.8%) とした。これらの群によって、アイデンティティの達成や探求、家族に対する価値観などが異なることが示唆された。

特に、アイデンティティ尺度の得点とライフコースの関連については、成人期初期の職業選択においてアイデンティティと関連が弱い進路を選択し、現在子育て中心の生活を送っている者において、現在のアイデンティティ形成と同一化の程度が低いこと、逆に、成人期初期にアイデンティティに基づいて職業を選択しながらも現在は子育て中心の生活している者は、他と同程度のアイデンティティ形成や同一化がなされていることが示唆された。

(3) 日常の自己と他者の調整に関わる要因

14 日間の日誌における出現数について、本研究で取り上げた要因による差を検討したところ、まず、両立群と家庭中心群の比較では、当然のことながら前者の方が仕事の葛藤調整が多く ($t(29) = 4.69, p < .01$) 後者の方が子との葛藤 ($t(29) = -2.32, p < .05$) や家族間の葛藤 ($t(29) = -2.45, p < .05$) の調整が多かった。ただし、夫との調整に差はなかった(n.s.)。

子どもの数 (1 人 vs. 2 人) については、子との葛藤 ($t(29) = -2.45, p < .05$) や家族間の葛藤 ($t(29) = -3.22, p < .01$) は子どもが 2 人いる人の方が多かったが、仕事との葛藤 ($t(29) = 2.52, p < .05$) は子どもが 1 人の方が多かった。10 歳以上の子の有無による差については、いずれの値も有意な差はみられなかった。

過去のライフキャリアの選択については、まず、大学卒業時の積極的な進路選択をしたか否かについては、子との葛藤においてのみ有意差があり ($t(29) = 2.10, p < .05$)、積極的に選択した群において子との葛藤が多かった。妊娠・出産時より仕事との両立を希望していたか否かについてみると、仕事との葛藤においてのみ有意差があり ($t(29) = 2.92, p < .01$)、積極的に両立を志向していた群において平均値が高く、仕事との葛藤が多かった。

(2) で上述した過去のキャリア選択と現在の状況とを組み合わせ分類した 4 群ごとの平均値を Figure 1 に示した。1 要因の分散分析の結果、主効果が有意であったのは仕事との葛藤のみであった ($F(3, 30) = 29.36, p < .01$)。ただし、Figure 1 をみると群によって平均値のパターンが異なることがわかる。

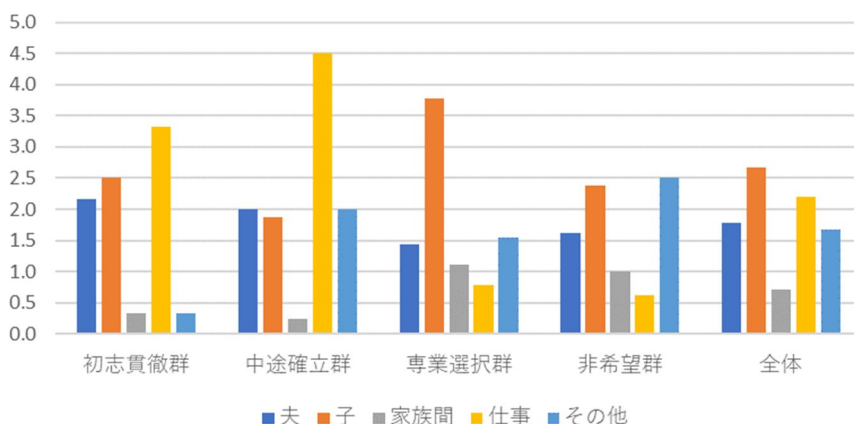


Figure 1 ライフコースの 4 群による葛藤の種類別の平均値

他に、日誌に登場した内容の種類とさまざまな尺度との相関を検討したところ、以下の有意な相関がみられた。仕事との葛藤は、多次元的アイデンティティ尺度における「反芻的探求」と負の相関 ($r = -.38$)、意味づけの「調節」と正の相関 ($r = .45$)、伝統的な家族観である「性別分業」 ($r = -.48$) や「慣習」 ($r = -.40$) と負の相関 (逆に、家族間の葛藤は正の相関がありそれぞれ .61, .51)、子との葛藤とリベラルな家族観である「公的責任」との間には負の相関 ($r = -.40$)、子の葛藤と第 1 子の問題行動とは正の相関 ($r = .42$ 、第 2 子の問題行動との相関係数の方が高いものの $N = 14$ であり、有意ではない)、家族間の葛藤と抑うつとは正の相関 ($r = .38$)、夫との葛藤と夫への抑制的な関わりとは正の相関 ($r = .41$)、「母性愛」信奉と家族間葛藤が正の相関 ($r = .50$)、仕事との葛藤は負の相関 ($r = -.39$)、夫との葛藤と夫婦満足との間に負の相関 ($r = -.43$) などが見いだされた。さらに、詳細は省略するが、両立群と子育て中心群で群別に検討すると、変数間の相関のパターンは群によって異なっていた。

以上のように、本研究ではサンプル数は 31 名と少ないものの、1 人ひとりからさまざまな種類の豊かなデータを収集した。そして、日々どのような調整を行っているかはこれまでのライフキャリアの選択、現在の仕事の状況やライフスタイル、価値観など様々なものが関連し、仕事をしている人では仕事における調整が主となる日が多い分、子育て中心の人では子どもとの調整が行われていること、ただし、いずれの場合も生活満足度に影響を与えるのは子どもとの調整ではなく夫との関係で行われる調整と関係する可能性が高いこと、などが明らかになった。

データは未だ分析途中であり、今後、特に面接における語りの分類方法について検討して、さらなる分析を行う。とりわけ質問紙による量的データ、面接による語りのデータ、日誌法による自由記述のデータといった質の異なる各データ、また、過去・現在・未来についてのデータをどのようにつなぎ合わせて理解していくかの方法について検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平井美佳
2. 発表標題 子育て期における自己と他者の調整
3. 学会等名 発達心理学会（話題提供）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平井美佳
2. 発表標題 日誌法による子育て期の母親における自己と他者の調整
3. 学会等名 日本心理学会（ポスター発表）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平井美佳
2. 発表標題 子育て期の女性におけるアイデンティティ：成人期初期および現在のキャリア選択と多次元のアイデンティティ発達との関連
3. 学会等名 発達心理学会（ポスター発表）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----